

国際交流事後活動ニュース

# MACRO COSM

マクロコズム '98.7

◎特集 「第10回世界青年の船」



vol. 23

(財)青少年国際交流推進センター



船内活動



◀ 「ピースセミナー」  
世界の子供達の絵に  
囲まれて  
原爆の悲劇が、二度  
と起こらないこと、  
そして世界平和を願っ  
て、全員で千羽鶴を  
折り平和を願うメッ  
セージを書きました

第10回世界青年の船

〔1/20〕日本（東京）～セイシェル（ポート・ヴィクトリア）～ケニア（モンバサ）  
～ヨルダン（アカバ）～オマーン（マスカット）～シンガポール～日本（東京）〔3/19〕

「世界青年の船」は、北・中・南米方面と南西アジア・アフリカ等方面を隔年で訪問しています。第10回は、後者のコースでした。外国青年は、1月11日に来日して日本でのプログラムを体験した後、出発前研修で日本青年と合流しました。1月20日、「にっぽん丸」は、日本と訪問地である4か国を含む13か国の青年約300名を乗せて東京港を出航しました。

▼ コンピュータールームは、ディスカッション・コミッティによって活用されました



▲ ディスカッション  
様々な国籍や宗教の青年達が「人種問題」「環境」「国連」等をテーマにディスカッションを行いました。時には対立し、そして学びあい、互いをより良く知るチャンスでした





▲ エジプトの参加青年は、ナショナル・プレゼンテーションの後「エジプシャン・トレジャー（エジプトの宝）」と名付けたダンス・クラブを作りエジプトのダンスを教えてくださいました



▲ ケニア、タンザニア、南アフリカがナショナル・プレゼンテーションで発表した歌は、「第10回世界青年の船」の歌となり、全員に広がっていきました

▼ 「世界青年の船」で初登場のラクロス



▲ 「フードフェスティバル」ギリシャとバーレーンのコーナー 日本を食文化から知ってもらおうと日本各地からの名産品が並んだ楽しい企画となりました。ここにギリシャとバーレーンが特別出店。さらに盛り上げてくれました

船内では、講義、ディスカッション、グループ活動等が行われ、共に生活していく中で、青年達は、国境のない平等で見事な理想コミュニティが形成されていきます。

茶道クラブ ▶ 体格のよい外国青年に出されるお茶の味はまた格別(?)





寄港地活動



◀ ヨルダンのマジャーリ首相への表敬の際の懇談  
左よりマリック指導官、北島団長、イギリスのNL、首相



▲ ヨルダンの知的障害者施設の訪問



各寄港地では、表敬訪問、施設  
見学、交流活動等が実施されまし  
た。

◀ ケニアのアカンバ・ハンディクラフト・センター

日本滞在



外国青年は9日間の日本滞在中に、東京での表敬、課題別視察、地方旅行でのホームステイ等を体験した後に日本参加青年と事前研修で合流しました。

◀ ホストファミリーとしゃぶしゃぶを楽しむオマーン青年  
(広島市)

# 未来への投資

## ～発見と友情の航海～

「第10回世界青年の船」指導官

**Rabinder N. Malik**

(前国際連合大学高等研究所客員教授)

### I. 発見と友情の航海

国連大学退官後、アメリカや日本の大学から、度々、非常におもしろい内容の依頼を受けることがありましたが、今回の「世界青年の船」は、私が今まで関わった中で、最も興味深いものでした。

総務庁主催のこの素晴らしいプログラムは、30年前に「青年の船」という形でアジアとオセアニアの交流事業として始まりました。

現在は「世界青年の船」と名称を変え、その名の通り、世界を股にかけるようになりました。訪問国は、一年ごとに東側と西側に航路を変え、私が参加をした「第10回世界青年の船」では、アジア、アフリカと中東を訪れました。

今回のプログラムのテーマは、「世界に広がる友情の架け橋」でした。「にっぽん丸」では300

人以上の青年たちが、約2か月間、まさに共同生活を営む、という体験をしました。航海中、船は「グローバル・ヴィレッジ・コミュニティ（地球的共同体）」となり、PYと呼ばれていた青年たちは、それぞれの異なる国や文化的背景を代表するメンバーとして、そのコミュニティに参加していました。参加した国は14か国で、アジア（日本、インド、スリ・ランカ）、ヨーロッパ（ギリシャ、スウェーデン、イギリス）、アフリカと中東（ケニア、南アフリカ共和国、タンザニア、エジプト、バハレーン、オマーン、アラブ首長国連邦、ジョルダン）という構成になっていました。

プログラムの目的は、青少年の国際交流推進ということで、異なる国からの参加者と生活を共にしながら、国際交流を実際に体験をする場を提供しています。また、国際交流と国際協力の視野を

### 主な内容

未来への投資	5～8	広報活動(福岡県)	13～14
Rabinder N. Malik 前国際連合大学高等研究所客員教授		九州青年の翼(九州ブロック)	15
「第10回世界青年の船」より	9～10	アンニョンハセヨ(香川県)	16
第三世界に車椅子を送りませんか	11	だいうんどうかい(滋賀県)	17
帯広に大集合(北海道)	12	SWY 東京連絡会議	18～19

### 〈表紙の説明〉

「第8回世界青年の船」  
～上岡弘二団長 写真展～  
“青春群像'96”の作品より



広げる役割も果たしています。この素晴らしいプログラムを通じて、参加者は自分自身を見つめ直し、他の国の文化や習慣を学ぶことで、真の国際人になっていくことができるのです。

### 〈日本でのオリエンテーション〉

全ての参加青年はオリエンテーションのために東京に集まり、外国人青年は、日本人家庭でのホームステイも体験します。また、参加者の3分の1が日本人であるために、外国人参加青年は、日本の文化や習慣を深く理解することが可能になり、逆に日本人参加青年は、共通言語を英語とする中で、国際的な感覚を身につけて生活をするようになるのです。



▲ Mr. Malik (財団の事務所にて)

## Ⅱ. 船の行程

2か月間の航海中、船はセイシェル（ポート・ヴィクトリア）、ケニア（モンバサ）、ジョルダン（アカバ）、そしてオマーン（マスカット）に寄港し、2日間から4日間の滞在をしました。それぞれの寄港地で素晴らしいプログラムが組まれており、各国の青年省の協力のもと、地元の青年たちと文化交流や活動を行うことができました。これは、参加者にとって、異なる国々における活動やプログラムの在り方を知り、実際に体験をする良い機会だったのではないのでしょうか。

### 〈日々の活動〉

PY、指導官、そして管理官は、毎朝「モーニングアセンブリー」から一日の活動を始め、文化的、教育的、社会的、もしくはスポーツやレクリエーション的要素を含んだ活動をします。日々の活動は、参加青年が中心となって行いますが、その中でも特に意味のあるプログラムは、各国による「文化紹介（ナショナル・プレゼンテーション）」

でした。このプレゼンテーションは、非常にきちんと準備がされ、異なる文化を理解するために、とても良い企画でした。また、クラブ活動や自主活動を通して、PYは異なる言語、音楽、そしてダンスなどを学んだり、運動やゲームをして楽しみました。これらの日々の活動は、全ての国の参加

者が一緒に行うものだったため、参加者が密接なつながりを持つようになり、こうして生まれた交流が、生涯を通じての、国境や人種を越えた友情へと発展していったのです。その成果は、下船後に交わされている、「世界青年の船・ネットワーク」でのメッセージのやり取りにも顕著に現れています。

セミナーとディスカッションは、プログラムの中でも教育的な意味を持つ時間でした。指導官は7名乗船し、それぞれの分野でのセミナーを開き

ました。私のセミナーは、「21世紀における国際連合の役割」という内容でしたが、それぞれの見方は異なるものの、先進国と発展途上国からの参加者の、国連に対する深い関心に感銘を受けました。また、これに加えて、国連の役職者の方が途中で参加され、青少年活動に関する国連の役割についての特別講演をいただきました。

ディスカッションは、世界平和、国際連合、環境、アフリカの現状、中東の危機、性別の問題、人権、青少年の雇用、差別、食糧危機などの世界的に問題となっている事柄について話し合われま

した。また、船内でも重要な役割を果たしたプレス・クラブは、様々な情報を掲載したニュースレターや、「第10回世界青年の船」のビデオを編集していました。

私自身もいくつかの活動に参加させてもらった他、様々な交流の中で、多くの人と個人的に話をする機会を得ることもできました。こうして築くことができた友情は、一生続くものと確信していますし、私にとっての宝ともいえます。また、「ミスター・アドバイザー」に選んでいただけたことも、光栄に思っています。

### III. An Investment for the Future — 未来への投資 —

For a person like me who has spent most all his adult life working for the United Nations system, and one who has made his mission in life to promote multi-cultural exchange and understanding in the community I live in and elsewhere in the world, the SWY provided me with a wonderful opportunity to spread my message to the youth of the world. And I was encouraged by the warm and active response from the youth. It was heartening to see among the youth this deep interest in problems of global concern. This is a good omen for the future as these youth are the leaders of the 21st century.

On a personal note, I saw in the eyes of the youth, particularly from the developing world, myself forty years ago - when after finishing the University I was worrying about my future - and understood very well their concerns. I could share

私自身のように、大人になってからの人生のほとんどを国際連合の組織の中で費やし、自分自身の周りや世界中に、多国間交流や国際理解を広めることに取り組んできた者にとって、「世界青年の船」は私のメッセージを世界中の若者に伝える素晴らしい機会でした。また、それに対して参加青年から温かく、そして活発な意見を得ることができ、とても励まされる思いでした。世界的な問題に、若者たちが深い関心を寄せていることを知り、嬉しくも思いました。彼等が21世紀を担う若者たちであるだけに、これは素晴らしい兆しです。

参加青年、特に発展途上国の青年たちの目を見ていると、40年前の私自身の姿を見ることができます。大学を出て、自分自身の将来に不安を感じている、そんな状況を良く理解することができます。また、そんな彼等と、私自身が様々な国の国際連合で働いてきた経験を分かち合うことができました。参加青年から送られてきた手紙を見て



with them my own experience of life in different countries working for the United Nations. Judging from some of the letters that I have received from the PY's, this program has been of immense benefit to them and would have an impact on their life as a whole.

### Respectation for the Japanese Government

To conclude, I am deeply impressed by the initiatives take by the Government of Japan in carrying such an excellent program for promoting international exchange and friendship among the youth of the world. The benefits of such a program are far-reaching and manifold because every year, through this program, hundreds of youth are being given an experience which changes the course of their life and makes them more sensitive and aware of other cultures. And also, each of these youth spread the message of international understanding among his family members, his community and country, which will make this growingly interdependent world of ours a better and a more harmonious place to live.

**More alumni of SWY means a more peaceful world. This is thus an investment for the future.**



も、このプログラムが、彼等の人生に多大な影響を与えたことが良く分かります。



### 〈日本政府への敬意〉

最後になりますが、私は、このような青少年の国際交流と友情を深める、素晴らしいプログラムを企画した日本政府に、非常に感銘を受けました。この体験が若者たちに与える影響は遠大であり、また多様でもあります。というのも、毎年、数百人ずつの青年がこのプログラムに参加し、それぞれが人生の針路に何かしらの影響を受け、そして他の国の文化に対して敏感になり、関心を持つようになるのですから。そして、彼等がこの体験によって得たメッセージを、家族や住んでいる地域と国に広げていくことによって、いまや相互依存の上に成り立っている国際化社会が、より平和で住み易い世界となっていくことは間違いありません。

「世界青年の船」の参加者が増えることは、世界の平和へとつながります。これが、「未来への投資」ということなのです。

〔誌面の関係で、第3部は原文と訳文を、その他は訳文のみ掲載させていただきました。〕



## 「世界青年の船」を経て

「第10回世界青年の船」

小原ナオ子

世界が一つの社会であり、国境を取り去られた各国が全て一つの地域となるなら、人はそれぞれが地球市民として、共に幸せに生きる道を真剣に探すと思います。

「世界青年の船」は小さくとも、まさに、多くの異なる文化を持ちあわせた平和な社会でした。船上での生活は、自分の利よりも相手の立場や気持ちへの配慮と、互いに尊重し合おうとする前向きな姿勢があったため、争いも起こらず、壁にぶつかる時を含めて、若干個人差はあっても良い体験として、一人一人の心の中に鮮明に残っています。

それは、この2か月が同時に、現実社会における、さらに多くの異文化や時として理解し難い価値観の存在を認識し、それらを受け入れるという、大きな学びの一過程でもあったからだと思います。

頭上一杯に広がるさわやかな大空と、生の躍動を感じさせる深く美しい海を見ながら、時には無数の星を称える夜の空間の中で、出会った友達たちの顔と、その背後の生活を思い浮かべながら、船上での生活をよくふり返ったりしたものでした。

「世界青年の船」を経て、私は、実に多くを見聞き感じたとともに、教わり学ぶことができました。自分の意見をしっかり持ち、伝えるよう努力することの大切さを再認識しましたし、教わると同時に教えてあげることの重要性を感じる場面も

ありました。広い視野でのものの見方や考え方を教わる一方、管理部や船内のスタッフの方々が私たちのために朝早くから夜遅くまで働く姿に感動し、立場は違うにしても、自分をふり返る機会にも恵まれました。

特に、文化や習慣、価値観が異なるものであっても、笑顔と思いやりのある行動は、どんな時も、共通した開かれた心の現われとして人と人を結ぶのを目の当たりにし、感激しました。

これからの大切なことは、この貴重な体験と数多くの感動を忘れず、毎日の生活に持ち込み伝えていくことですが、それらを「伝えるメッセージ」に変えるのは困難で、長い時間をかけて、自ら進めて行くものだと思います。

一人一人が、この事業を通して培った想いを抱きつづけるなら、その想いは確実に違う未来を創造すると思います。世界各地に同じ気持ちを持つ仲間がいるなんて素敵です。

「世界青年の船」を経て、思うことです。





## 「世界青年の船」を通じての 人間関係の変化と心の動き

「第10回世界青年の船」

山田 英治

私は、仕事で非行少年やその家族、夫婦、親族等を相手に心理学、教育学、社会学的な手法を用いて少年の更生に必要なものを少年や保護者と一緒に考えたり、家族間の葛藤を調整する等の問題解決に当たっている。

この船では、そのような役割から離れて、思い切り骨休めして羽を伸ばすつもりだった。

しかし、外国青年の中には、ケースワーカー的に活動している青年も多く、日本の福祉の仕事に関わるプロフェッショナルとして意見を求められることもしばしばあった。このようなやりとりや指導官からのアドバイスもあって、ボランティア・カウンセラーを引き受けることにした。

私は、この役割を通じて参加青年の思いやそれまでのドラマに触れることができた。特に、外国の参加青年からは、個人としての意見を尋ねられることが多かったため「自分がどういう人間で、何を考えているか」を常に意識することが必要だった。具体的な波としては、参加青年が年頃ということもあって、恋愛や結婚の話をよくした。このやりとりの中で、日常当たり前に過ごしている自分の結婚生活を振り返る点も多く、日常的に随分支えになってくれているものだと感謝したものだ。

もちろん私は、人の相談を受けてばかりいたのではなく、私自身もいろいろな人に癒されたし支

えられた。自分が弱ったときに人の気遣いを受けられることは、格別の有難さを感じる。一つの例として、私は、オマーンの滞在中に食あたりで39度を超える熱を出して寝込んでしまった。その時にアフリカの青年の一人が心配して、私の手を握ってしばらく様子を見てくれていたことがとても印象に残っている。言葉だけではなく、心のコミュニケーションの大切さを改めて実感した瞬間が、そこにあった。

参加青年の体験を追体験させてもらったことと共に、自分の体験を通じて「この期間の船旅が、人生を凝縮したものであるとするならば、生きていくことは、人に傷つき人に癒されることの繰り返しなのかもしれない……」等と普段は思い浮かべもしない青臭いことを、広い海と青空の風景の中で気持ちが大きくなるに任せて感じていた。

今後も、「世界青年の船」で得たつながりを大切にしていきたいと強く感じる今日この頃である。

この原稿は「第10回世界青年の船」の文集に寄せられたものから取り上げました。誌面の関係で、いただいた原稿から一部を省略して掲載させていただきました。





平成10年度活動スローガンを寄せて下さった八木さんに原稿をお願いし、最近の活動の様子を知らせていただきました。

～引き継ごうあの日の感動を、育てよう次の世代を～

### 第三世界に、車椅子を送りませんか

八木 実（昭和48年度海外派遣）

我が身を振り返ると、40歳台も終わりに近づき、仕事に忙殺される毎日で、国際交流は「遠い日の花火」という観もするが、ただ一筋、海外に不要となった車椅子を送る運動を側面から支援することにより、ご縁が繋がっている。

私は東京の肢体不自由児が通う養護学校の教師である。ここで、東京の別の養護学校に勤める茅根富子さんのメッセージを読んで欲しい。

「第三世界で、車椅子が欲しくてもあきらめている子どもたちに、日本の中古の車いすを送り、障害者の痛みを分かち合うやさやかな運動を、できるところから始めませんか。粗大ゴミで廃棄しようとしている車椅子に第二のお務めをしてもらいませんか」

彼女は、かつてご夫君の仕事の都合で一旦教職を辞し、モロッコで足掛け3年過ごした。そこで見たのは、足が不自由なのに、地面をはって移動している子どもの姿だった。帰国後、養護学校に就職した彼女は、勤務先で有志を募り、「第三世界の子どもたちに車椅子を送る会」を結成。都内の養護学校のPTAなどに呼びかけたところ、続々と車椅子が寄せられた。平成8年以降、モロッコ、中国、マリ共和国に合わせて400台の車いすを送り、現地で大歓迎された。海外への輸送費は、ODAの「草の根無償資金協力」を利用している。



次回はエチオピアかケニアを予定しているそうだが、会員の皆さんも、近くの養護学校に呼びかけるなどして協力してみませんか。これまでの実績では、車椅子の他にバギーや補装靴、歩行器なども扱っている。なお、昼間電話を受けて問い合わせに答えられよう事務局となってくださる方も求めている。

なお、国内の輸送費は提供者に負担していただいている。お問い合わせは、私まで、なるべく手紙でお願いしたい。

〒257-0002

神奈川県秦野市鶴巻南5-8-11

電話 020-52-73620

八木 実（午後4時～10時）



## 組織づくり「帯広に大集合」

松本 歩恵

(第21回「東南アジア青年の船」)

北海道青年国際交流機構（以下、北海道 IYEO）は、年4回の会報の発行、壮行会や報告会の実施など、ここ1、2年でやっと支部らしい活動が軌道に乗り始めました。北海道には現在約300名の事業参加者がおり、そのうち、約60名の方が北海道 IYEO の会員として会費の納入をしていただいております。

### 道内を4ブロックに分けて

今年度の総会で年間行事を決めるにあたり、今までどうしても札幌中心の活動をしてきたことから、各地にいる会員同士との交流を深め合おうということになりました。北海道は道東・道北・道南・道央の四つのブロックに分けることができますが、ちょうどその年に小樽から帯広に異動になった会員がいることと、私が帯広出身で土地に多少明るいことから、まずは、道東ブロックの会員同士の交流から始めようということになりました。

### 道東メンバー集合！

日程を7月20日と決め、道東在住の事業参加者をリストアップしてみると20ほどになりました。往復はがきで案内状を急いで作ったものの、参加されてからかなり年数が経っている方も多く、また当日まで日が浅いこともあり、どのくらいお返事を戴けるかとても不安になりました。もしか

すると札幌から訪ねる方が（会長を含め5名）多くなるのではないかとも思いました。しかし、いざフタを明けてみると9名もの方から「参加」の心強いお返事をいただきホッとしました。

当日、富樫会長の運転する車で札幌を出発し、走る約5時間、帯広へ到着しました。会場には釧路から岩間さんと志田さん、帯広とその近郊からは伊藤さん、大西さん、萩さん、高島さん、竹村さん、室矢さん、清水さんがお集まり下さいました。ほぼ全員が初対面でしたが、自己紹介を終えるとアッという間に和やかな雰囲気になり、あちこちで話しに花が咲いていました。「帰国してから何かしたいとずっと思い続けてきた」、「同期のつながりがあってもタテのつながりがなかったので皆さんに会えて良かった」、「こういう会を開いてくれ、参加できて楽しかった」等々の声を皆さんから聞くことができました。



## 会員のネットワークで視察研修

何年経ていても、海外派遣というキーワード一つで年代の違った者同士がすぐに打ち解け合い、何でも語り合えるこのネットワークのすばらしさを改めて実感しました。二次会は高島さんが行きつけの素敵なお店を紹介して下さり、ほぼ全員がなだれ込んでアッという間に時間が過ぎていきました。次の日は、帯広に異動し、清水さんの案内でJICAの研修センターへ見学に行きました。

伊藤さんも参加して下さり再び楽しいひと時を過ごすことができました。

帯広では多くの会員に直接お会いすることができ、このような会を歓迎して頂き、組織作りの第一歩の手応えを感じました。こうして各地に少しずつネットワークを培い、いつかは北海道中の会員同士の顔が見え、声が聞けるようになればと願っています。私たちはこの成果を励みに毎年各ブロックで「大集合！」を続けていこうと気持ちを一つにしています。

## 総務庁青年国際交流事業の広報活動について

### 福岡県の取り組み

福岡県青年国際交流機構会長  
安達真理子

福岡県青年国際交流機構（以下、福岡IYEO）では、年2回、総務庁青年国際交流事業の事業説明会及び帰国報告会を実施します。3月末は、総会と募集時期に合わせ、福岡市内の福岡県国際交流センターで行い、もう一つは10月上旬、北九州市で行います。

### 他団体と協力して

10月上旬は、「北九州国際交流ウィーク」にあたり、地域の国際化を推進することを目的として、福岡県国際交流協会のある国際村交流センター一帯で各種イベントが行われますので、この一角で実施します。この地域は、国際協力事業団九州国際センターなどもあり、国際色あふれる町で、国際交流や国際協力に関心ある市民がたくさん訪

れます。

実際の準備は、この事業の事務局である北九州国際交流協会の職員のご尽力により、事前に日程や実施内容、準備物品など打合せ、前日に物品の搬入、パネル展示等を行います。

広報活動は、この事業全体のパンフレットが事務局で作成されますので、記事を掲載してもらい、福岡県内の関係諸団体に配布されます。また、福岡IYEO「船と翼」という機関紙にも掲載し、会員に広報します。





## 事業募集も兼ねて

3月の場合は、福岡 IYEO 独自で行います。

### 〔広報〕

#### 1. チラシを作成。

チラシの表面は、日時、場所、内容等の案内、裏面は、青少年国際交流事業一覧を印刷します。

#### 2. チラシを送付。

送付先：マスコミ（新聞社4社とNHK）、県や市の国際交流協会、青年センターなど。また、福岡県青少年対策課に総務庁から届く応募要項と一緒にこのチラシを同封してもらいます。そうすると各市町村の担当課も配布してもらえます。

北九州市の場合は、応募要項を依頼してきた人にチラシを同封してくれます。

#### 3. 福岡 IYEO 機関紙「船と翼」や総会案内文書に案内。

### 〔準備〕

#### 1. パネル借用依頼。

日時が決定後、早急に総務庁へパネルを各事業（3種）10枚ずつ依頼。

#### 2. 当日配布資料の作成。

参加者の体験記、青少年国際交流事業一覧、IYEO 概要、福岡県の応募先、福岡県の参加状況等

#### 3. 当日役割分担の打合せ

### 〔当日〕

#### 1. 最近の既参加青年が自分の参加した事業の説明と体験談を発表。

#### 2. ビデオ上映、歌、踊りなど。

#### 3. 会場に事業紹介パネル、写真、衣装、民芸品事業報告書等の展示

#### 4. 参加者への個別相談会。

後半1時間程度、一般参加者と既参加青年と懇談。

私達の活動は「地域の国際化、国際人の養成」を目指し、そして、一人でも多くの方がこの事業を知り、このすばらしさを理解してもらいたいと思っています。また、ひいては理解者がたくさん増えれば青年達が参加を希望した時に、企業等から退職せずに参加できるようになるのではと考えるからです。微力ですが、皆で頑張っていきたいと思っています。

また、私達の活動には、福岡県や各市、国際交流協会などの方々のご協力があってスムーズに行われています。この場をお借りして改めて感謝いたします。



九州ブロック内のIYEOは、九州ブロック協議会を結成し、定例の各県会長会議を行うなどして情報交換を行ってきました。そうした会合を重ねる中で、共同事業実施の提案がなされ、本年1月、「第1回九州青年の翼」を実施し、マレーシア、シンガポールを訪問しました。

## 「第1回九州青年の翼」を終えて

今回、九州ブロック協議会の共同事業として、「第1回九州青年の翼」を実施しました。訪問地を各県IYEO会長と協議した上、マレーシアに決定し、途中シンガポールに寄るという行程で、1月14日～19日（5泊6日）で訪問交流をしてきました。団員は、九州各県IYEOが中心となり、団員の募集を行いました。当初九州8県からは、最低3名以上を選出してもらい、約30名を予定していました。残念ながら予定人数に満たなかったものの、総員18名の団になり、福岡空港を出発しました。

（財）青少年国際交流推進センター、日本青年国際交流機構事務局及び「SSEAYP International Malaysia（マレーシア同窓会）」会長のアウジさんの御協力により、すばらしいスケジュールを組んでいただきました。特に表敬訪問先のマレーシア・スポーツ青年省では、現地青年の活動状況の報告、更に青年省大臣との記念品交換等、大変貴重な体験をすることができました。

また、ホームステイプログラムを組み込んだ文化交流を始め、産業教育等に関する見学など各種活動を通じて親睦を深めることができ、素晴らしい体験となりました。この時期は、イスラム社会では断食を行う月（ラマダン）で、マレーシア青年達をはじめホストファミリーの皆様にも大変ご迷惑をかけたことを心苦しく思っています。

前IYEO九州ブロック幹事 金城 常雄



マレーシアに3泊4日の滞在後、途中訪問国シンガポールにて一泊し、「SSEAYP International Singapore（シンガポール同窓会）」会員を中心に、現地青年との交流、交換会があり、さらに感動を深めることができました。シンガポール青年達より、次回のホームステイは、「是非シンガポールに」との誘いもあり、次の訪問国として検討してみたいと思います。

今回初めて九州ブロック協議会で「九州青年の翼」を成功させたことは、大変意義深い事であり、参加した青年達が、各県に戻り、本事業で得た感動・体験を、他の会員に伝え、事後活動の活性化・会員増強へと協力してくれることを期待しています。

終わりに、関係者の皆様方に対し、厚く御礼を申し上げるとともに、今後とも長く交流の継続ができるよう努力していきたいと思ひます。



### アンニョンハセヨ・お隣の国韓国を知ろう

「第1回国際青年育成交流事業」参加青年

原 郁

昨年の秋も深まった頃、香川 IYEO は県在住の外国青年を招致して野外活動を通じて相互理解・友好親善に努めることを計画した。

かねてより在県の留学生が日本の友人を得ることなく帰国するという悲しい現状を聞き、心を痛めていたところであり、当 IYEO が本格的に独自のプログラムを始めるのにあたって最適な事業であると思われた。国が近くても意外に内情をよく知らないというので、今回の対象は県内の大学などに留学している韓国青年とし、釣りとバーベキューをすることにした。

#### 風にも負けず、磯釣りに挑戦!

さて10月26日当日。少々風が強く感じられたものの、好天に恵まれていた。オリエンテーションを終え、海岸へ降りて行ったときにはアマチュア釣り人が波を見て残念そうに帰っていくところだった。「今日は釣れないよ」という助言を尻目に、総勢72名（韓国青年17名、日本青年55名）は8班に分かれて釣りを始めた。案の定・ではあったが、「釣りは初めて」という日韓双方の青年は、重くなった竿を持たせあっては、歓声を上げていた。一方砂浜では数人の青年がハンゲル文字を書かれた傷だらけのコーラの空缶を見つけて覗きこんでいた。漂着したのだろうか。二つの国が隣り合わせということを改めて感じさせられた。釣れた小さなキスは肉や野菜、焼きそばともにバーベ



キューで賞味された。たれに唐がらしをたくさん入れて。

#### 互いの国を知る

片付けを終えた班は芝生の上で輪になって座る。グループ交流と称して各班はそれぞれ恋愛について、家の中での家事分担、或いは通っばい観光スポットの紹介など、話題は尽きることなく終了時間を迎えた。その後、韓国の歌を2曲も歌って閉会とした。参加青年達はわずかに疲労した様子ではあったが、閉会後も会場に残ってあちこちで名刺やアドレスブックを交換する光景が見られた。

#### 次のプログラムは?

この事業の成果はすぐに表れ、仲の良い友達が何人もできてその1~2週間後に寮へ遊びに行き韓国料理を御馳走になったり、一緒に遊びに出かけたりしたというケースを耳にした。学校側からも喜ばれ、当 IYEO も所期の目的を達成することができてまずは一安心していたところ、この事業をさらに拡大して広く留学生を募りスポーツ交流を実施することが決まったのはそれから1か月も経たないうちのことであった。

## 国際交流と理解のつどい「だいうんどうかい」

実行委員 西川 規斉

滋賀県青年国際交流機構では、「派遣」（滋賀県若人の翼）と「受入」（総務庁の招へい事業）の2本柱を両輪に、日々青少年の健全育成に励んでおりますが、3本目の柱として、滋賀県内在住の外国青年との交流も図りたく、本年度は国際交流と相互理解のためのつどい「だいうんどうかい」を2月28日～3月1日の1泊2日で企画・実施しました。

### チームワーク

初日は、翌日のメインイベントである「だいうんどうかい」に向けてのチームワーク作りを図るため、応援合戦時のエール交歓の為のエール作り等を行い、時が経過するに従って、各班のチームワークが盛り上がり、当初の目的の半分がこの「ワークショップ」で成されました。

夜の研修では、オリンピックたけなわの折から、「スポーツ」についてディスカッションを行いました。（時間の関係から、発表は翌日の体育館に掲示しました。）

### 本番「だいうんどうかい」

2日目、今回のメインである「だいうんどうかい」では、大変盛りたくさんの種目のスポーツを、皆フル回転の出場で、和気あいあいの「大運動会」が出来ました。

たった2日間の短い期間での交流でしたが、参加者一同の心が一つになったひと時だったと思い

ます。皆一生懸命取り組んで、優秀チームを初めとしていくつかのささやかな景品も当たりました。また、得点の低いチームには、罰ゲームとして、体育館の掃除が与えられましたが、皆快く引き受けていただき、大変さわやかな気持ちで終了しました。

しかし、今回の反省点も多々あります。今回、「滋賀県若人の翼」の事後研修もかねて実施したため、日本青年については、多くの参加者を得ましたが、外国青年については、国際交流員の2名のみでした。

外国青年に多く参加してもらう為には、参加費を免除すれば参加が得られると思いますが、その分を日本青年より徴収するわけにはいかないし、大きな課題となりました。

今回の反省点は、次回では解消できるように務め、今後も青少年の健全育成を図るため、このような企画を続け、精進してゆきたいと思っています。

（滋賀県青年国際交流機構 国際交流部副部長）





## 「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議

### 〈会議の流れ〉

平成10年1月15日から21日まで、「世界青年の船」事業既参加青年連絡東京会議が開催されました。東側航路の同会議は1996年に続き、2回目でしたが、1回目の会議で事後活動組織の基本的な行動指針を決定したのを受け、今回は具体的な行動計画（Action Plan）を作成することを目標としました。

各事後活動組織が活動しうる分野をいくつかに分け、今年1年間のタイムスケジュール及びプロ

ジェクト責任者を決めました。これによって、各AAが自主的に活動をしていく基盤を作ることができたことは、大きな成果でした。

各国事後活動組織が日本大使館や政府機関との協力のもと、選考の段階から関わり、乗船まで参加者との関係を大事に育てていこうという意欲を、とても強く感じることができました。新しい事業参加者への協力は、「世界青年の船」の情熱を維持していく上で、最も効果的であると思われるので、参加国の維持性など、検討していくべき点であると考えます。

### 〈会議決定事項〉

1998年の活動計画として下記の点を決定しました。

#### 1. Communication/Coordination(ネットワーク作り)

- (1) コンピュータネットワークの充実  
(ネームリストの作成・ホームページの作成等)
- (2) ホームステイネットワーク

#### 2. Recruitment (参加者募集活動)

- (1) 各国内における「世界青年の船」事業のPR活動と募集
- (2) 日本大使館および各国政府担当機関と連携

#### 3. Selection (選考)

参加青年の選考基準について以下の点を十分に加味することを提案します。

- (1) 選考基準  
寛容かつ理解力／リーダーシップ  
社会意識／心身の健康  
自国文化の知識／英会話能力

#### 4. Preparation (乗船までの準備)

- (1) 新しい参加者への情報提供
  - ・日本文化の紹介
  - ・経済的アドバイス（スポンサーの探し方）
  - ・各国文化紹介のアイデア
  - ・船内ディスカッションの準備
  - ・地球規模の問題の提示

#### 5. Sponsorship (協賛)

- (1) 各AAによるスポンサーへのアプローチの仕方マニュアル作成
- (2) 各AAベースではなくSWYAA全体としてスポンサーに協賛依頼（共通マニュアルの作成）

#### 6. Local Involvement (各国AA活動)

- (1) 過去の参加者へのアプローチ
- (2) コンピュータネットワークを通じ、全AAが共通してできる年間共通プロジェクトを選定

〈各国会議出席者〉

国名	氏名	参加回数	国名	氏名	参加回数
Australia	Mr. Stephen Clark	7	Mexico	Ms. Alejandra Reyes	9
Brazil	Mr. Robson Aurelio De Queiroz	8	New Zealand	Mr. Adam Johnston	9
Canada	Mr. Paul Greenberg	9	Peru	Ms. Gisella Karina Benavente	9
Chile	Mr. Leopaldo J. Morales Celpa	9	Tonga	Mr. Harold Shirley Baker	9
Costa Rica	Ms. Tatiana Salgado Loaiza	5	USA	Ms. Nichole Diane Plummer	7
Dominican Rep.	Ms. Luisa Maribel Flech	5	Venezuela	Ms. Maria Jesus Mendes Mendes	7
Ecuador	Ms. Angelita Orbea Garces	7	Japan	Ms. Keiko Tsubaki	2/8
Fiji	Ms. Faga Jioje Fasala	9			

青少年国際交流事後活動推進大会  
 日本青年国際交流機構第14回全国大会徳島大会  
 第5回青少年国際交流全国フォーラム

夢・感動 とくしま'98

～ 語ろう世界への架け橋 ～

日程：平成10年11月28日（土）～11月29日（日）

会場：ルネッサンス リゾート ナルト

☎ 770- 鳴門市鳴門町土佐泊浦字大毛16-45 ☎ 0886-87-2580

内容：講演「我がまちの国際交流」

ドイツのリュネブルク市と鳴門市、オーストラリアのケアンズ市と日和佐町そしてアメリカのワシントン州タクイラ市と井川町というように、徳島県で海外と姉妹都市提携をしているこれらのまちの市長や町長は、総務庁青少年国際交流事業に参加した我らの先輩たちなのです。若き時の貴重な体験を「我がまち」に根付かせた意欲に満ちた話を楽しく聞き、共に語ろうではありませんか！

この他、全国の仲間との楽しいパーティ、藍染などの体験プログラムや鳴門の渦潮見学まで盛り沢山の2日間です。



## お知らせ

7月の近畿ブロック大会を皮切りに9月、10月と各ブロック大会が続きます。自分のブロック以外を覗いてみたい方、大歓迎！ブリティン・ボードに各大会の連絡先を掲載していますので、興味のある方は、お問い合わせ下さい。

### 平成10年度九州ブロック大会の予定について

日 程：平成10年9月19日(土)～20日(日)

会 場：沖縄ホテル [所在地] 沖縄県那覇市大道35番地 TEL. 098-884-3191

連絡先：座間味良枝 030-793-6844 (携帯電話/17:30以降)

(日 程)

9/19(土) 13:00	国際交流事業関係者連絡会議	9/20(日) 7:00～	朝食
14:00	受付開始/開会式/討論会	9:30～	全体会議
19:00～	懇談会/自由討論会	11:00	閉会式

### 「第7回青年の船」20周年開催予定

詳細は、後日お知らせいたしますので、お楽しみに!!

#### 編集後記

私たちが行う国際交流事業や国際交流活動が、「十代の少年少女に夢を持たせられるものになったら良いのに」と思うのは私だけでしょうか。

自分が持っているものの素晴らしさや可能性を信じる力の大切さを強く思う今日この頃です。自分の未来は、自分でつかみ取るもの……。

\*本誌の年間講読をご希望の方は、(財)青少年国際交流推進センターまで葉書又はFAXにてお申し込み下さい。年間講読料は1,500円です。

MACROCOSM(マクロコズム) 7月号 Vol.23 1998年7月1日発行(隔月発行)

編 集：マクロコズム編集委員会

発 行：財団法人 青少年国際交流推進センター

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-35-14

TEL 03-3249-0767

FAX 03-3639-2436

e-mail LDP04056@niftyserve.ne.jp

編集協力：総務庁青少年対策本部

日本青年国際交流機構

定 価：198円(本体189円)

印刷所：株式会社 絢文社

TEL 03-3959-3960

## 「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議

(本文 P.18 参照)



▲ 東廻りコースとしては、第2回目の東京会議より具体的な活動の構築を目指して、議論に熱が入りました

各担当に分かれての分科会で、具体策を  
▼ まとめました



栃木県青年国際交流機構の受入で IYEO の地域活動を体験してもらいました  
久しぶりに書道を体験して、大喜びの各国代表者



## 「世界青年の船」事業既参加青年代表者会議

～インターナショナル・リユニオン～ オマーン(マスカット)

西廻りコースとしては、第2回目のインターナショナル・リユニオン  
▼ 再会を喜び合うともに、ネットワーク作りに向けての思いが高まりました



▶ 懐かしの船内で、参加時にもどって熱心なディスカッション





## 「第24回東南アジア青年の船」報告会

3月15日(日)の午後12時30分より、国立オリンピック記念青少年総合センターにて「第24回東南アジア青年の船」報告会を第17回青少年国際理解セミナーとして開催しました。

参加青年達は、全体会での体験報告、パフォーマンス披露、会場を取り巻く各国の展示や船内活動紹介、分科会と精一杯に頑張りました。

総務庁青年国際交流事業の募集時期でもありましたので、募集説明会も兼ねた形で行うことができました。



▲ 水井実行委員長の挨拶で開会しました



船内で会得したアセアン各国のパフォーマンスを披露する参加青年。各国の文化を体験を通じて学びました



▲ 各自が撮った写真を様々な分野別に説明を加えて展示しました